

## 巻頭言——無芸大食への奈落

### Preface : Infernal regions as “no accomplishment but eating”

幕末のころ、京に上った薩摩藩の侍の出で立ちは質実剛健で、京（都会）風ではなかったので、「いも侍」と揶揄された。田舎風の「いも」で何が悪いと誇り高く、居直れば良かった。しかし、薩摩藩の郷士は地元でも「いも侍」と呼ばれることがあり、屈折した劣等感をもっていたので、明治維新の後、「いも侍」はサツマイモをやめて、「こめ華族」になり、イネを食べることにした。欧米の圧倒的な科学技術による武力によって薩英戦争にあっさり敗退したので、反転して攘夷をやめ、鎖国を解き、欧米の科学技術を導入することにした。明治政府の中心となった人たちは欧米に大挙して留学し、「和魂洋才、富国強兵」を説く、国家主義の政治家や官僚になっていった。

江戸時代幕藩体制下の鎖国の中で、薩摩藩はさらに固い鎖国を「国内」に対して行い、他藩人の入域を極力拒んでいた。ところが一方で、薩摩藩は南西諸島、先島諸島を支配下に置き、琉球を属国として支配し、密貿易をしていた。藩内の支配と経営は郷士制度により堅固であった。家臣を城下に集めずに、外城を各地につくり、防衛・支配体制を日常の事としていた。薩摩隼人は示現流の剣術を学び、暮らしぶりは質実剛健を旨としていた。宗教に対しては不寛容で、キリスト教ばかりでなく、仏教（特に一向宗）も厳しく取り締まり、水戸藩の影響を受けて廃仏毀釈を早くから強行し、神道を強要していた。

シラス台地で稲作は困難なので、早くからサツマイモを取り入れて、食料の確保を図っていた。鹿児島美味しいイモ焼酎、多くのサツマイモの品種はそのおかげで生み出されたのである。亜熱帯に近い鹿児島や沖縄が根菜農耕文化に基礎をおくのは必然の生態的適応である。サツマイモがイネより優位にあって当たり前である。京や江戸のコメ消費経済に染まる必要はなかった。

「いも侍」が「こめ華族」になったという劣等感の裏返し、この思い付きを確かめるために、鹿児島に行き、神風特攻隊の出撃基地であった知覧の武家屋敷を見に行った。古い屋敷は少なかったが、出城を守る城塞のような石垣の麓街区、庭にも石積みがあり、戦闘を想定した街並み景観であった。

和魂洋才といいながら、国家主義の政策に沿うようになったようだ。柳田国男らのように和魂を求めた人々もいたが、結局は和魂の抜け落ちた洋才としての科学技術を洋魂抜きで無思慮に振興（信仰）することにした。さらに国家主義は幾多の戦争へと人々を駆り立てて、終には太平洋戦争に至り、日本の「大和魂」では「神風」も吹かず、神風特攻隊の若者を死に至らしめたが、歴史上初めて外国に、本土進攻を許す大敗を喫した。原子爆弾という卑劣な大量殺傷兵器始め、膨大な物量と人員を第2次世界大戦に投入したアメリカ軍に侵略を許し、日本の指導者たちは決定的に民族としての誇りを失った。

アメリカ軍に負けたのは戦時配給制度で中山間地にまで普及させたごはん（イネ）食が原因であり、欧米人が常食としているパン（コムギ）食が健康に良いと、「ムギ官僚」はアメリカからの食料援助に依存した。アメリカからすれば、国際貿易の利益を見込んで、過剰生産したコムギで日本人を餌付けして、食料輸入国に墮落させて、いずれ国際的な食糧戦略に組み入れようとの魂胆であったのであろう。

この戦略は功を奏して、日本人は第一次産業を捨て、自給農耕・生業すら失い、拝金の極致、無芸大食への奈落を選び取ったのである。食料安全保障の政策を思考停止した「無食政治家」のもとで、日出る国の日没を見ることになった。再び、この国の人々はお来迎を拝むことができるのであろうか。

（黍稷農季人）